

この展示室では、企画展示「佐賀町エキジビット・スペース」展に関連して、当館コレクションのなかから、1980年代日本の現代美術を紹介します。

1970年代後半から80年代にかけて、世界各地で物語性の強い具象絵画を描く作家が現れ、「ニュー・ペインティング」あるいは「新表現主義」などと呼ばれました。それに呼応するように日本でもあらゆるジャンルを混交したような表現主義的絵画を描く作家たちが現れ、「ニューウェーブ・ペインティング」などと呼ばれました。山倉研志、関口敦仁、荒瀬景敏は、そうした動向のなかで注目を集めた作家です。レリーフ状に構成した木材に絵画を描いた彦坂尚嘉の「P.W.P(プラクティス・バイ・ウッド・ペインティング)」シリーズや、ゆれる木立やその影を写真に撮り拡大して画面にプリントした秋岡美帆の作品も、この時代に登場した新しい絵画表現と言えるでしょう。

1970年代ヨーロッパで活動していた白川昌生は、83年の帰国後も、日本の文化や空間表現を意識して立体やドローイングの制作を続けました。「赤一彫刻」ドローイングでは、西欧の遠近法とは違う、開放的で可動的な空間表現が探求されました。

川俣正は、1970年代末から、板材を用いた仮設性の強いインスタレーションによって既存の建造物に介入するプロジェクトを展開します。そのプランとして制作されたレリーフには、独特な空間表現が見られます。

今改めて1980年代の美術を振り返り、現在にも様々な形で継承され影響を与えているこの時代の表現の多様性を感じていただければと思います。

No.	作者名 (生没年)	作品名	制作年	技法・材質	寸法等	備考
1	山倉研志 (1956- )	豚と花嫁	1982	アクリル、合成樹脂、 コラージュ・パネル	210×363×18、 41×180×85 (人形)	寄託作品
2	関口敦仁 (1958- )	OXのある風景	1986	油彩、アクリル、木炭、 ペン・カンヴァス	280×215	寄託作品
3	荒瀬景敏 (1958- )	無題	1981	アクリル・麻、パネル	180×340	寄託作品
4	彦坂尚嘉 (1946- )	P.W.P.116 絵画都市(歯医者)	1989	アクリル・木	215×265.8×63.9	寄託作品
5	白川昌生 (1948- )	赤一彫刻	1987	オイルパステル、鉛筆・ 紙、額装	135.4×251	安達眞枝氏寄贈
6	川俣 正 (1953- )	ヴェネツィア・ビエンナーレ、 プラン・モデル	1982-86	バルサ材、合板	78.3×142.2×116.4	寄託作品
7		ヴェネツィア・ビエンナーレ、 プラン・ドローイング1	1982	バルサ材、鉛筆、 グワッシュ・紙	55.6×76.5	寄託作品
8		ヴェネツィア・ビエンナーレ、 プラン・ドローイング2	1982	バルサ材、鉛筆、 グワッシュ・紙	55.4×76.4	寄託作品
9		ヴェネツィア・ビエンナーレ、 プラン・ドローイング3	1982	バルサ材、鉛筆、 グワッシュ・紙	55.6×76.6	寄託作品
10		ライムライト・プロジェクト、プラン 14	1985	バルサ材、合板	183×203.5×11	寄託作品
11	秋岡美帆 (1952-2018)	木の葉をふるわせ	1985	アクリル・カンヴァス	200×200	

※都合により展示作品を変更する場合がございます。ご了承下さい。